

《論文》

『ハリー・ポッター』におけるクイディッチ

—学校物語のスポーツについての考察—

桑野 久子

Quidditch in *Harry Potter*.

A Study on Sport in a School Story

Hisako KUWANO

キーワード：ハリー・ポッター，クイディッチ，学校物語，スポーツ，ゲーム

Key Words: Harry Potter, Quidditch, School story, Sport, Game

要旨

イギリスのパブリック・スクールでは人格形成のために、ラグビーやクリケットなどの集団スポーツ（ゲーム）が伝統的に行われており、そのパブリック・スクールを舞台とする学校物語の中でもスポーツが描かれることが多い。J.K. ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズは魔法魔術学校が舞台になっており、学校物語の系譜に並ぶものと捉えることができるが、その中に登場するクイディッチという架空のスポーツが大きな位置を占めている。物語におけるクイディッチの描かれ方を通して、このスポーツが主人公たちの成長に大きな役割を果たしていること、物語全体が大きなゲームとして描かれていることを考察した。

1. はじめに

J.K.ローリング (J.K. Rowling) の『ハリー・ポッター』*Harry Potter*シリーズは1998年の第一巻発売以来、10年後の最終巻まで空前のヒットとなり、全巻が映画化され、一つの社会現象となった。ただの子供向けのファンタジーと思われがちだが、作者はアイデアを思いついた時は子供向けの本になるとは考えていなかった

という¹⁾。そして文字通り老若男女を魅了する作品として、本・映画だけでなく、ウェブサイトやテーマパークなどに至るまで、いまだにその人気は衰えていない。その中でも意外な発展を遂げているのが、クイディッチ (Quidditch) と呼ばれる、物語に登場するスポーツである。架空の魔法界のスポーツであるにも関わらず、アメリカの大学生が地上で行う競技として楽しむようになり、いまや世界大会が開かれるまで

に広がりを見せている。これがいつまで続くか、一般にスポーツとして認められるか否かはさておき、このスポーツは物語の中で大きな位置を占めており、人々を惹きつけるものである。このクイディッチというスポーツが物語にとってどのような意味を持つのかについて読み解いてみたい。

2. 学校物語とスポーツ

10歳まで孤児として、叔母夫婦の虐待に耐えながら生きてきた少年ハリーは、11歳の誕生日に突然魔法学校への入学許可証を受け取り、初めて自分が魔法使いであることを知る。物語の舞台 Hogwarts 魔法魔術学校 (Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry) は、11歳から17歳までを過ごす寄宿制の学校で、物語は1巻につき1学年が描かれる。そのために、ハリーが1年生から最終学年に至るまでの7巻になっているのだ。作者ローリングは電車の中でこの物語の構想を思いつき、その時点で話の結末まで出来上がっていたが、最初に力を注いだのが魔法学校であるという²⁾。学校を舞台とするこの物語は、しばしばイギリスの伝統的な「学校物語」(school story) の系譜に並ぶものであると指摘される。

イギリスの「学校物語」とは19世紀後半から20世紀前半に多く書かれた、主にパブリック・スクールを舞台とした児童文学の一つのジャンルである。実際にパブリック・スクールに通っている上流・中流上層階級の児童だけでなく、それ以下の階層の子供たちにも憧れを持って読まれてきた。特にトマス・ヒューズ Thomas Hughes の『トム・ブラウンの学校生活』 *Tom Brown's School Days* (1857) はその

代表格として挙げられ、しばしば比較されている。ヒューズ自身もパブリック・スクールのラグビー校出身で、この作品は自分の息子に対してパブリック・スクールについて伝えるために、匿名で書かれたものである。

『トム・ブラウンの学校生活』では主人公のトム・ブラウンがラグビー校に入学し卒業するまで、パブリック・スクールの様々な慣習を体験し、友人や教師に出会い、成長していく様が描かれている。寮には「ファグ」と呼ばれる上級生の世話をする下級生の係などのしきりがあるが、元来腕白で明るい性格のトムは、積極的に仕事を覚え、学校に馴染んでいく。トムは上級生フラッシュマンの理不尽な暴力といじめに抵抗し、この「独立戦争」に勝利し、「法と秩序を取り戻す」。

池田潔著『自由と規律』によると、様々な校風のパブリック・スクールにも共通の特徴があり、(1)寮、(2)校長、(3)ハウスマスターと教員、(4)学課、(5)運動競技とその精神、が挙げられている。(46-47) 寮での規律正しい生活のために、監督生 (プリーフェクト prefect, ラグビー校ではプレポスター pr(a)eposter) の制度がある。トムは校長寮に所属し、監督生は寮生をよく統率している。また、パブリック・スクールの学生は厳しい校則への服従を求められ、それを犯すと厳重な罰を与えられるというが、トムも親友イーストと遊びや悪戯に精を出し、度々規則を破って罰を受けている。

そして規律を身に付けるための厳しい訓練として最も重視されているのが「運動競技」であるという³⁾。「ワートルローの戦いは、イートン校の運動場で勝ち取られた」という有名なウェリントンの言葉にあるようにパブリック・スクールでの教育、特にスポーツは大英帝国の

指導者たち、支配階級、ジェントルマンを形成してきた。トム・ブラウンの父親も、息子を学校にやる理由として「息子が勇敢で、役に立つ、嘘をいわぬ英国人になり、紳士になり、キリスト教徒になってくれれば外に何もいうところはない」（上89）と考えている。

ヴィクトリア朝後半には「アスレティシズム（Athleticism）」と呼ばれる教育理念が広まったが、それは「チーム・ゲームこそが若者、特に男子生徒の人格を形成するうえで至上のものであると見なし、その教育的な価値を盲目的に礼賛した教育論」であり、「その温床となったのが一九世紀のパブリック・スクールの運動場だった」⁴⁾。多くの近代スポーツが生まれたのもこの時代以降のイギリスであり、クーベルタン男爵が近代オリンピックを提唱するきっかけとなったのも、イギリスのパブリック・スクールでのスポーツである。

イギリス人が大切にしている「忠誠心 loyalty」を養う手段としてスポーツがあり、「個人的な利害、肉体の苦痛を犠牲にして己の属するチーム全体の利益に奉仕することが運動競技の真の精神と考えられている」⁵⁾。特に学校においては、団体競技が、「共同体にあって、全体の利益のため自我を没し、勝って驕らず負けて悪びれず、敵を重んじ、苟も不当の事情によって得た有利な立場に拠って勝敗を争うことを潔しとしない、いわゆる『スポーツマンシップ』を修得するものとされている」⁶⁾。

現代の学校教育のナショナル・カリキュラムでも体育において「ゲーム」と呼ばれるいわゆるチーム・ゲームが重視されており、「フェア・プレイ、自身の統制、他者の尊重、規則に従って生きることを学ぶ、そしてチーム内で他者に対してはたすべき自身の義務を理解す

る、といった概念は、適切に教えられるチーム・ゲームからまさに学ばれうるもの」と考えられている⁷⁾。イートン校などのパブリック・スクールにおいても、課外活動としてチーム・ゲームにより「競争をとおしての人間形成」を目指しているという⁸⁾。

『トム・ブラウンの学校生活』に戻ると、第5章のタイトルは「ラグビー校とフットボール Rugby and Football」であり、トムがラグビー校に到着した初日についての話のおよそ三分の二がフットボールについての記述である。ちょうど寮対抗戦の日で、自分もフットボールが好きで経験もあるので、試合に出してもらえたらどうかとトムが言うと、イーストは「駄目だよ・・・だって君はルールを知らないじゃないか。ルールを覚えるのに一か月はかかるよ。」（上118）と答える。ラグビー校式フットボールが他のフットボールといかに異なるかということが分かる台詞である。しかし、イーストの用語やルールの解説を聞きながら試合を見ているうちにトムは自分のすべきことを覚えてしまう。そしてイーストの体を張ったプレイに触発されて、トムは最後にとうとうボールに向かって飛び込んでいく。一瞬気を失うが、主将のブルックに「いいプレーヤーになる」と褒められる。

もう一か所スポーツにページが割かれているのは、第8章「トム・ブラウンの最後の試合」で、トムの卒業前日のクリケットの試合である。トムは19歳で監督生、クリケットの正選手で主将を務めており、すっかり逞しくなっている。トムとアーサーと一緒に試合を見ている若い先生は「僕にはこのゲームが、科学的にわかりかけて来たよ。それにこれは何という高貴なゲームだろう。」「その教える規律と相互への

信頼とは非常に貴重だと思う。」「それは自己を滅し切ったゲームでなければならない。それは個人を十一人の一団の中に融かし込んでしまう。かれは自分が勝つために戦うのではなくて、自分の組が勝つために戦うのだ。」と言う。それに対して、トムは肯定して「こいつはゲーム以上ですよ、それは一つの制度です。」「一等になるか、個人が勝つのを目的にして、自分の組が勝つのを目的にしないゲームに比べて、フットボールやクリケットがずっとずっと優れたゲームである訳はそこにあるのです。」と答える。(下179)

選手の主将についても、先生は「学校内の社会で、かれの占める地位の重大さはどうだ。ほとんど校長のそれに匹敵するほどにむずかしい。手腕と、優しさと、剛毅さと、その外僕の知らないいろんな稀な資質が必要なのだ。」(下179-180)と言う。トムは「どれもこれも欲しいと思う資質ばかりですね」と言い、アーサーには「君は統率術の点ではまだまだ学ぶべきことが多い」(下180)と言われる。この日のクリケットの試合でも主将トムは、試合には不利になることが分かっているながら、自分を出してほしいという若者の願いを聞き入れたり、「技量だけからいえば、かれを入れたものかどうか、私にもはっきりはわかりません」「しかしわたしはかれを加えずにはいられなかったのです。大変かれのためになることですし、それに私がどれだけかれの恩恵を蒙っているか、先生のご想像も及ばぬくらいです」(下184)と言ってアーサーを打者に指名したりする。案の定、試合は負けに終わる。

そして試合後、先生との話の中で、アーサーと同室になったことを「最大の幸運事」(下191)と表現したのに対して、実は校長がトム

の悪戯ぶりに心を痛め、他人の世話をすることですっかりした男らしさと思慮深さを身につけるのではないかと考えて、一番優秀な新生生のアーサーを同室にしたのだと聞かされる。それまでトムは、校長のことを尊敬はしていたが、学校を改革した功績を自負し、学校内での自分の地位は独力で築いたもので、校長にも引けを取らないと思っていた。しかし校長は多忙な公務の中、生徒一人ひとりのことをよく見て、導いていたのである。「この瞬間からこのかた、校長の、少くともトム・ブラウンに対する勝利は完璧なものとなった。」トムは「あらゆる点で兜を脱いだ」、そして「校長を信じない箇所はなくなった」のである。(下194)

実際ラグビー校の校長トマス・アーノルドはラグビー校を築き上げた人物として高名であるが、このような校長の持つ資質については『自由と規律』の中にも同様の記述がある⁹⁾。生徒一人ひとりに目を配り、温かく、時に厳しく見守り育て上げる、絶対的な力を持つ優れたリーダーがパブリック・スクールには不可欠なのである。そしてこのことは Hogwarts 魔法魔術学校にも引き継がれている。

このようにパブリック・スクールにおいて、スポーツ(ゲーム)は生活の一部であること、そして少年を成長させるものとして大きな役割を担っており、それが社会、国家(英国)の基礎を築くものと考えられていることが分かる。だからこそ、トム・ブラウンの学校生活はゲームで始まりゲームで終わっているのだ。

3. 学校物語としての『ハリー・ポッター』

『ハリー・ポッター』において Hogwarts 魔

法魔術学校は魔法使いならば入ることのできる学校で、イギリスにはこれ以外の魔法学校がある訳ではない。その点からすると、公立学校に対するパブリック・スクールとは厳密には異なるのだが、寄宿制であること、寮に分かれていること、監督生がいること、優れた校長がいることなどだけを取り上げて、パブリック・スクールに近い存在と言えよう。

作者ローリング自身は公立校コンプリヘンシヴ・スクール出身で、寄宿制の学校に通った経験はない。「寄宿学校小説の魅力」について尋ねられたインタビューで、ローリングは次のように答えている。

In fiction, boarding school comes over as a surrogate family. The pupils are with their contemporaries and free of their parents and the guilt attached to upsetting them.¹⁰⁾

両親から離れて、同年代の子供たちだけで生活をし、喜んだり悩んだり喧嘩をしたりしながら、協力して様々な問題を解決していく。しかし、孤児のハリーにとってはそれまでの叔母夫婦の家での暮らしがあまりに過酷だったため、この学校に来て初めて喜びや幸せを感じる。「hogwartsはハリーにとって初めての、最高に素晴らしい家庭だった。」(7下465-6)そして、この学校に来て初めてハリーは自分のことや両親のことを知るのである。

寮については、hogwarts魔法魔術学校には4つの寮があり、新入生はまず組分け帽子を被って寮が決定される。グリフィンドールは勇気ある騎士、ハッフルパフは正しく忠実で忍耐強い、レイブンクローは賢く機知に富む、スリザリンは手段を選ばず目的を遂げる狡猾さを

持っている、とそれぞれの寮に明確な性格がある。組分け帽子はハリーのことを「勇気に満ちている。頭も悪くない。才能もある。・・・自分の力を試したいというすばらしい欲望もある。」と評するが、ハリーはスリザリンに入りたいと祈る。すると組分け帽子は「スリザリンに入れば間違いなく偉大になる道が開ける」としながらも、ハリーが望むグリフィンドールに組分けする。

ハーマイオニーもロンも、ロンの兄弟たちもみなグリフィンドールで、はじめから敵対的なドラコ・マルフォイはスリザリンである。スリザリンは「例のあの人」ヴォルデモートの出身寮であり、その信奉者「死喰い人」たちもこの寮出身である。寮は学校内の生活・学業・スポーツにおいてライバルであるだけでなく、ヴォルデモートの闇の魔法に与するものと戦うものという立場の違いを明らかにする。

寮にはそれぞれ寮監がいるのもパブリック・スクールの特徴の一つである。グリフィンドールのマクゴナガルとスリザリンのスネイプは、それぞれ自分の寮をあからさまに最上とする。普段は厳格な教師であるマクゴナガルもクイディッチの試合のことになると熱くなり、自分の寮の勝利にこだわるころは人間らしさを覗かせる。「チームの寮監たちも、上品なスポーツマンシップの名のもとにごまかそうとはしていたが、是が非でも自分の寮を勝たせてみせると決意していた。」(5上629))

監督生は寮生を取りまとめる役で、成績が優秀で、人格的に優れた者が選ばれるので、名誉ある役職であり、尊敬の対象であるが、時に「いい子」過ぎて煙たがられたり、馬鹿にされたりもする。後にロンとハーマイオニーも監督生になるが、ハリーは選ばれない。それはハ

リーがすでに「十分すぎる責任を負っている」からというダンブルドアの配慮によるものだったのだが、ハリーは落胆の気持ちを隠せない。この時ハリーは初めてロンに対し嫉妬の気持ちを抱く。

校長のダンブルドアはhogwarts魔法魔術学校を取り仕切る、全知全能の神のような存在である。威厳があり、穏やかで、常に学校や生徒のことを見守っている。特にハリーのことを気にかけ、陰に日向に支えていく。皆に尊敬され、信頼される、まさにラグビー校の校長のようである。しかし物語が進むにつれて、実は必ずしも完璧ではなく、弱みもあるところがわかってくるところは『トム・ブラウン』と異なる点である。

4. クイディッチというスポーツ

このようなパブリック・スクールと共通する特徴の中でもう一つ挙げられるのが、スポーツである。ただし、魔法使いの世界なのでラグビーやクリケットではない。実際ロンはサッカーのことを聞いたことはあるが、よく知らず、「ボールがたった一つしかなくて、しかも選手が飛べないゲームなんてどこがおもしろいかわからない」(1, 213)と言う。そのロンが「世界一おもしろいスポーツ」(1, 161)と紹介するのがクイディッチである。クイディッチが学校の授業として行われているという記述はない。授業で行われるのは飛行訓練で、クイディッチは課外活動である。この点も従来のパブリック・スクールの体育の授業は基本的なことを行い、スポーツ(ゲーム)は課外活動として行うということを踏襲していると言える。

クイディッチは1チーム7人で対戦する、

ボールをゴールに入れることで得点するゲームである。が、魔法使いなので、箒に乗って飛びながら空中で行われる。ボールは4つあり、クアッフル(革製、直径12インチ、縫い目がない)、ブラッジャー2つ(黒い鉄製、直径10インチ、選手を無差別に追いかけるように魔法がかけられている)、黄金のスニッチ(クルミ大、小さな銀色の羽がついている。できるだけ捕まらないように魔法がかけられている)の三種類がある。

競技場は楕円形で両端にスコア・エリアがあり、3本のゴールポストが経っている。以前はゴールバスケットだったが、現在は15mの金の支柱の先端に地面と垂直な輪がついている。

選手はキーパー1人(スコア・エリアの内側で味方のバスケットを守る)、ビーター2人(バットを使ってブラッジャーを敵陣に打ち返し、味方の選手を守る。得点したり、クアッフルを扱うことはない。肉体的に頑健であることが求められるので、魔女より魔法使いが担うことが多い。高度なバランス感覚が必要とされる)、チェイサー3人(一番古くからあるポジション。クアッフルを投げ、ゴールの輪のどれかに入れると10点獲得する。クアッフルを持ったチェイサー以外はスコア・エリアに入れない。二人以上のチェイサーが入った場合には、ゴールすることが許されない)、シーカー1人(スニッチを捕まえると150点獲得する。最も軽量で速く飛べる者、目がきくこと、手離して飛ぶ能力が必要。試合結果に重大な役割を担っているので、敵に妨害されることも多く、華やかなポジションだが、怪我も多い)の7人である。

ハリーは最初の練習で、キャプテンのウッドからルールの説明を受け、この新しいスポーツのルールを「全部覚え込もうと意気込んでい

た。』(1, 246) その様子はトム・ブラウンがイーストにラグビーのルールを教わっている場面を思い出させる。この目新しい競技を理解するために、ハリーは自分の知っているもので喩えてみる。ゴールポストは「マグルの子供がシャボン玉を作るのに使うプラスチックの輪にそっくり」であるし、ゲーム自体は「六つゴールがあって箒に乗ってプレイするバスケットボールのようなもの」である。

作者はクイディッチのアイデアはどこから来たのかという問いに次のように答えている。

I invented Quidditch while spending the night in a very small room in the Bournville Hotel in Didsbury, Manchester. I wanted a sport for wizards, and I'd always wanted to see a game where there was more than one ball in play at the same time. The idea just amused me. The Muggle sport it most resembles is basketball, which is probably the sport I enjoy watching most. I had a lot of fun making up the rules and I've still got the notebook I did it in, complete with diagrams, and all the names for the balls I tried before I settled on Snitch, Bludgers, and Quaffle.¹¹⁾

また、このインタビューを行ったフレイザーは

Perhaps it is because J.K. Rowling disliked hockey so intensely at school that she invented the exhilarating game of Quidditch, which plays such a crucial part in every Harry Potter book so far.¹²⁾

と述べている。

『クイディッチ今昔』*Quidditch Through the Ages*には古代の箒競技から現代のクイディッチになるまでの変遷が描かれている。1750年に魔法ゲーム・スポーツ部が設立され、クイディッチのルールが制定されたことになっている。

1. 飛行の高さに制限はないが、地上の競技場の境界線から外に出てはならない。
2. 「タイム」の時だけは選手の足が地に着いてもよい。
3. ペナルティ・スローをするチェイサーは、中央サークルからスコア・エリアに向かって飛ぶ。相手チームのキーパー以外の選手は、ずっと後ろに下がっていなければならない。
4. クアッフルを奪い取ってもよいが、プレーヤーの体のどの部分もつかんではならない。
5. 負傷した場合でも、代替りの選手は出せない。
6. 競技中、杖を携帯してもよいが、どんな事情があろうとも使用してはならない。
7. 黄金のスニッチが捕獲されたとき、あるいは両チームのキャプテンが互いに合意したときのみ、試合終了となる。(52)

ただし、「ルールは当然『破られるためにある』ものである」とあるように、反則も多く存在する。相手の箒の尾を捕まえて、速度を落とさせたり、邪魔をしたりする「ブラッキング」はよく登場する反則である。

また、ルールにはないが、クイディッチは男女混成のチームで戦われる。さらにプロリーグがあり、世界中に（日本にも）チームがある。ロンはチャドリー・キャノンズのファンで、部

屋中チームカラーのオレンジ色で壁一面にポスターが貼ってある。その様子はマグル（人間）の子がサッカーなどのチームを応援するのと同じである。

用具として箒が必要だが、この箒の性能によって飛行技術が大きく左右される。特に、ハリーが最初に贈られた「ニンバス2000」はみんなの憧れの箒であったし、後に贈られた「ファイアボルト」はプロも使用している最高級の箒である。このような用具やブランドに対する憧れやこだわりというのも、人間界のスポーツと同様に描かれている。

5. 物語におけるクイディッチ

次にクイディッチがどのように描かれているか、どのように感じられているかについて、物語の順を追って見ていきたい。

第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』

Harry Potter and the Philosopher's Stone

ルールにあるように、結局試合の勝敗は黄金のスニッチを捕ることにかかっており、ゆえにシーカーというポジションがチームの要になり、花形選手となる。しかしその分、真っ先に敵に狙われるので、大きな事故も起きやすい。そしてハリーは入学早々そのシーカーに選ばれるのである。最初の飛行訓練の授業で、初めてにも関わらず自在に箒を乗りこなす。それまで叔母夫婦と従兄にいじめられていた人間の世界から解放されたとはいえ、魔法界のことは何一つ知らず、入学前から不安と劣等感でいっぱいだった。しかし、いざ箒にまたがってみると「不思議なことに、どうすればいいかハリーにはわかっていた。」（1, 220）「僕には教えてもらわ

なくてもできることがあったんだ」（1, 219）と、初めて自分に自信を持つことができる。この才能を見たマクゴナガルは、一年生は寮代表になれないという規則を曲げて、特別にハリーをグリフィンドール・チームのシーカー選手にする。

入学早々運動の才能を認められるのは、『トム・ブラウン』とよく似ているところである。異なるのは、このことが、それまでのハリーの劣等感を払しょくするものであり、「例のあの人」から生き延びた奇跡の男の子という、自分には全く記憶も実感もないレットルとは違い、自分自身の実力を発揮することにより誰の目にも明らかに見せることができる自信となることである。クイディッチは授業と宿題と並んで規則的な学校生活の一部となる。

第11章は「クイディッチ」というタイトルで、ハリーにとって初めての試合が描かれている。スリザリンとの対戦で、ハリーは箒に魔法をかけられて邪魔されながらもスニッチを獲得し、170対60でグリフィンドールを勝利に導いた。第13章は次の試合ハッフルパフ戦で、新学期から雨の日も雪の日も厳しい練習をした成果か、試合開始から5分もしないうちにスニッチを掴み、勝利して、グリフィンドールは寮対抗杯の首位に立った。ハリーは「ほんとうに誇りにできることをやり遂げた一名前だけが有名だなんてもう誰も言わないだろう。」（1, 328）と思う。

2度の試合での活躍で一躍学校のヒーローになったハリーだが、夜中に出歩いた罰として減点され、グリフィンドールは最下位に落ちる。「学校で最も人気があり、賞賛の的だったハリーは、一夜にして突然、一番の嫌われ者になっていた。」（1, 359）責任を感じたハリーは

クイディッチ・チームを辞めさせて欲しいと申し出るが、認められない。「もうクイディッチでさえ楽しくはなかった。」(1, 360)

しかし、その後ロン、ハーマイオニーと協力してヴォルデモートとの対決で賢者の石を守ったことで、点数を取り戻して、グリフィンドールは優勝する。「その夜はハリーにとって、いままでで一番すばらしい夜だった。クイディッチに勝った時よりも・・・」(1, 452) というように、友人たちと協力して問題を解決し、所属する寮の優勝に貢献できた充実感と喜びを知る。

第2巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』

Harry Potter and the Chamber of Secrets

2年生になると、スリザリンのクイディッチ・チームにマルフォイがシーカーとして加わり、ハリーとのライバル関係が更に強調される。マルフォイは自分たちを「純血」(pure blood)と呼び、一方マグル(人間)から生まれた者を「穢れた血」(mudblood)と罵り、ハーマイオニーたちを攻撃する。ハリーは母がマグルなので、「混血」(half-blood)である。ロンのウィーズリー家は純血の家系だが、父がマグル好きで貧乏子沢山な家族はマルフォイの軽蔑の対象である。

前年の最終試合でハリーが意識を失って出場できなかったため、300年来で最悪の大敗北を喫したことから、キャプテンのウッドは新たな計画をたてて厳しい練習を課す。そしてスリザリン戦直前の更衣室で、ハリーは「マルフォイより先にスニッチをつかめ。然らずんば死あるのみだ」(2, 250)と激励され、ブラッジャーに右腕を折られながらもスニッチを掴む。

3年生の選択科目を決める時も、ハリーは本

当に得意なものはクイディッチしか浮かばない。ハッフルパフ戦の前、毎晩夕食後に練習が行われ、クイディッチと宿題以外は何もする時間がない。寮対抗クイディッチ杯を獲得する可能性が高まっていたが、校内で相次いで生徒が襲われる事件が起きたためにクイディッチのトーナメントは中止となる。「秘密の部屋」の問題を解決したことで、ハリーとロンに200点ずつが与えられ、寮対抗優勝杯は2年連続でグリフィンドールが獲得する。

第3巻『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』

Harry Potter and the Prisoner of Azkaban

ハリーが3年生の年、キャプテンのウッドは最終学年になり、グリフィンドールは過去7年間で一度も優勝していないので、今年が最後のチャンスだと意気込んでいる。クイディッチ杯を獲得するという「ハリーの夢には一点の曇りもなかった。」(3, 206)

最初の試合相手はスリザリンから急きょハッフルパフに変更になる。悪天候の中での試合で、ハリーはスニッチを見つけて突進するが、突然100人の吸魂鬼がピッチに現れると、母の死ぬ間際の声が頭の中に響き、意識を失って落下してしまう。スニッチはハッフルパフが獲得し、グリフィンドールは試合に負ける。ハリーは初めて試合に負けたことにショックを受けるが、さらに箒ニバス2000が壊れてしまったことに「親友の一人を失ったような辛さ」を感じる。(3, 262)

第13章「グリフィンドール対レイブンクロー」では、クリスマスに憧れの最高級の箒「ファイアボルト」を贈られて、レイブンクローとの試合に臨む。吸魂鬼の恐怖に打ち勝ち、スニッチを獲得して勝利する。

第15章「クイディッチ優勝戦」では200点リードされているスリザリンと戦う。ハリーとマルフォイの敵意は頂点に達し、ハリーは「勝ちたいと思う気持では、寮生の誰も、ウッドでさえも、自分にはかなわないだろう」と思う。(3, 434) 作戦通り、50点以上点差を付けてからスニッチを獲得し、優勝する。

第4巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』 *Harry Potter and the Goblet of Fire*

第8章「クイディッチ・ワールドカップ」では、新年度ホグワーツに戻る前に、ロンの家族と30年ぶりにイギリスで開催される第422回クイディッチ・ワールドカップの決勝戦ブルガリア対アイルランド戦を観戦に行く。

この4年生の年は三大魔法学校対抗試合をホグワーツで開催するため、寮対抗クイディッチ試合は取りやめとなる。代表選手1人ずつ以外に、なぜかハリーが4人目の選手として「炎のゴブレット」に選ばれて試合に参加することになる。3つの課題に挑まなければならないのだが、第一の課題が近づいた時の精神状態は「クイディッチの試合の前よりもずっとひどい」と表現されている。

第一の課題では自分の強み、クイディッチで飛ぶことを生かす試合をするように忠告され、ハリーは「クイディッチの試合と同じだ」(4, 494)と自分に言い聞かせて、無事課題をクリアする。

第二の課題は湖の中から人質を奪い返すことで、ハリーは最初に人質のところまで到着するが、自分の人質だけでなく、全員の人質を見送ることができず、救おうとしたために制限時間を超えて最後に戻ってくる。しかしその「道徳的な力」が評価され、満点に近い点数を獲得する。

第三の課題の迷路のゴール優勝杯が罫になっており、ついにヴォルデモートが復活する。そしてこの時以降、ハリー・ポッターの物語は学校物語から大きく変化していく。

第5巻『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』 *Harry Potter and the Order of the Phoenix*

5年生になって、アンジェリーナがグリフィンドールのクイディッチ・チームのキャプテンになり、ウッドの後のキーパーにロンが選ばれる。シーズン初戦のスリザリン戦は、ロンが緊張と敵の野次のためにゴールを許すが、ハリーがスニッチを捕り勝利する。しかし、試合後にロンを執拗にからかうマルフォイに我慢できず、殴りかかったため、ジョージ、フレッドと共にクイディッチを禁止され、箒も没収されてしまう。

ジョージとフレッドは勉強よりも悪戯グッズの店を出す夢を持ち、唯一クイディッチがあるから学校に留まったと言うが、一方ハーマイオニーにとっては、クイディッチは「寮の間で悪感情やら緊張が生まれる」厄介なもので、「たかがゲーム」にすぎず、ハリーに「人の感情とかはよくわかっているけど、クイディッチのことはさっぱり理解してない」と呆れられる。(5下244) 次のハッフルパフ戦は、ロンの妹ジニーがシーカーとして出場し、見事スニッチを捕るが、ロンが14回もゴールを抜かれたことが響き、僅差で負けてしまう。

最終戦レイブンクロー戦は、予想に反してロンが活躍して勝利し、グリフィンドールを優勝に導く。ハリーが不在でも優勝できるということで、ハリーがクイディッチ・チームに不可欠な力ではなくなったこと、そしてロンがハリーに対する劣等感を脱して、自信を持つことを明

らかにする。5年生のはじめにロンとハーマイオニーが監督生になり、自分は選ばれなかったことでハリーは「ロンは僕の持っていない何かを持って」と落ち込んだことが思い出される。「僕はクイディッチでは優れている……だけど僕は、ほかのことでは何も優れてはいない」(5上267)と思っていたが、そのクイディッチでもハリーの活躍の場が失われている。

その一方で、死喰い人が集団脱獄し、ヴォルデモートの勢力が強まっている知らせを聞いて、ハリーは宿題と同列でクイディッチも「くだらない話」と言い捨てる。さらに、ダンブルドアが追放され、魔法省のアンプリッジが校長になりホグワーツを支配し、ハグリッド、マクゴナガル、スネイプも次々とホグワーツを去っていく異常事態で、クイディッチを楽しむ状況ではなくなってきているのである。

最後にはヴォルデモートの策略にはまり、魔法省での戦いになり、助けに駆けつけた不死鳥の騎士団の中でも慕っていた名付け親のシリウスを失ってしまう。これはハリーの「人助け癖」(5下485)が原因とされる。死喰い人のルシウス・マルフォイにも「英雄気取りが大きな弱み」でヴォルデモートはそれを利用したと教えられる。そして、自分とヴォルデモートの間に「一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ」(5下673)というつながりがあることを知る。

第6巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』

Harry Potter and the Half-Blood Prince

6年生になり、ハリーはクイディッチ・チームのキャプテンになる。最初の試練は選手の選抜で、新たなメンバーが加わる一方で、また神経質になったり、自信喪失したりと不安定なロンを何とかチームに留まらせる。初戦のスリザ

リン戦の前、ロンに幸運の薬を飲ませたふりをして暗示をかけたことが功を奏して、ロンは大活躍し、勝利する。しかし、この試合に欠場したマルフォイの怪しい動きが気になるハリーは「いままでこんなにクイディッチから気持が離れたことはなかった」。(6下133) 第2戦ハッフルパフ戦でも、競技場に行かないマルフォイの行方を気にしつつ試合に臨むが、ブラッジャーが直撃し、頭蓋骨を骨折して3度目の入院を余儀なくされる。試合は結局60対320で大敗する。最終戦レイブンクロー戦で300点以上取らないと優勝できないのに、ハリーはスネイプの罰則を受けることになり、試合に出場できなくなる。しかしまたしてもハリー不在の中、450対140で大勝し、ロンが優勝杯を手にする。

そしてその後、ダンブルドアと共にヴォルデモートの分霊箱を探しに行き、ホグワーツに帰ってきたところで、ダンブルドアはマルフォイに襲われる。しかしマルフォイはダンブルドアを殺すことがなかなかできず、ダンブルドアに頼まれたスネイプが代わりに止めを刺す。ハリーは自分を愛した人々が次々と自分を護って敵に立ちはだかり、死んでいったことに気づき、「もっとも偉大な庇護者」(6下492)を失ってしまい、これまで以上に孤独を感じる。

第7巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』

Harry Potter and Deathly Hallows

17歳の成人になり、学校外でも魔法を使えるようになるが、ハリーたちはもうホグワーツには戻らない。一切クイディッチが行われなだけでなく、そもそも学校物語でもなくなってしまふのである。ハリーたち3人にはダンブルドアの遺言と遺品が渡される。ハリーは「忍耐と技は報いられる」ことを思い出すために贈ると

の遺言と共に、最初の試合で捕まえたスニッチを受け取る。スニッチは「最初に触れる者が誰か、を認識できるように呪文がかけられて」（7上184）おり、「私は終わるときに開く」という文字が浮かぶ。学校へは戻らずに3人は、ダンブルドアの遣り残した、ヴォルデモートの分霊箱を探す旅に出る。一方hogwartsはヴォルデモートに支配され、スネイプが校長になり、イギリス生まれの魔法使いは「血統書」をもらってhogwartsに入学することが義務化される。hogwartsに不死鳥の騎士団も駆けつけ、死喰い人たちとの最終決戦が始まり、学校は戦場となる。

以上のように、物語の初期において、クイディッチはハリーにとって学校生活の一部で夢中になれるものであるだけでなく、生まれて初めて自分の実力を発揮でき、自信を持てるもの、人々から賞賛されるものであった。時に怪我を伴う危険なものであったが、さらに厳しい練習を積み、試合での経験を重ねて心身共に成長する。しかし、ヴォルデモートの復活以降、徐々に学校や世界に暗雲が垂れ込めてくる中で、気晴らしにもなったが、禁止されたり、試合に出られない事態が起こるようになり、クイディッチを楽しめる状況でも心境でもなくなってくる。そして最終巻ではクイディッチが行われなだけでなく、言及されることもほとんどないのである。

6. ゲームとしての戦い

第7巻の終わり近くに「長いゲームが終わり、スニッチは捕まり、空を去るときが来た」（7下467）という言葉がある。これまでのヴォル

デモートとの戦いをクイディッチのゲーム（試合）に例えているのである。あるいは、この物語全体をゲームと捉えていると考えることができる。そのように読み直すと、パブリック・スクールで重視されてきたゲーム（スポーツ）に特徴的な要素が盛り込まれていることに気づく。

（1）フェアプレイ（スポーツマンシップ）

パブリック・スクールのゲームで、あるいはスポーツ全般で重要視されるフェアプレイの精神がこの物語の中にも見られる。3年生のハッフルパフ戦でセドリック・ディゴリーはハリーが落下したのを見て、試合中止とやり直しを望んだが、ハリーは「フェアにクリーンに」ハッフルパフの勝利だと認めた。（3, 257）

三校対抗試合で第一の課題がドラゴンであることを知ってしまったハリーは、セドリックにも教える。なぜ教えてくれるのかと問うセドリックに「だって・・・それがフェアじゃないか？」（4, 477）と答える。フェアとはルールを守るのではなく、対等な関係であることなのである。この状況はまさに次の説明に合致する。「スポーツマンシップとは、彼我の立場を比べて、何かの事情によって得た、不当に有利な立場を利用して勝負することを拒否する精神、すなわち対等の条件でのみ勝負に臨む心掛をいうのであろう。」¹³⁾

逆に第二の課題でセドリックは第一の課題を教えてもらった「借りがある」とヒントを教えてくれる。第三の課題の迷路で、ほぼ同時に優勝杯に到着したセドリックはハリーが2度も救ってくれたので「君が優勝すべきだ」と優勝杯を譲ろうとする。「そういうルールではない」とハリーも説得を試みるが、セドリックの決心は固い。ハリーが提案し、二人で同時に優

勝杯を取ることにする。しかしこの優勝杯が実は「移動キー」になっており、二人はヴォルデモートのもとに瞬間移動し、セドリックは目の前で殺され、ヴォルデモートがついに復活を果たす。ハリーはフェアな決着を望んだのに、それが仇となり自分を狙った罠に友人を巻き込んでしまった罪悪感に苛まれる。

また意外なことには、復活したヴォルデモートもハリーに杖を持たせて、周りには手出しをさせず、一対一で戦い、決着をつけようとする。「対等の立場にあって初めてスポーツは成立する」¹⁴⁾という通り、本当の勝負はフェアな戦いによってしか決着がつけられない。ヴォルデモートでさえスポーツマンシップを有しているのである。

(2) チームワーク (One for All, All for One)

ヴォルデモートの復活を受けて、「不死鳥の騎士団」が再結成される。ダンブルドアの指示のもと、それぞれが役割分担をしてハリーを守り、ヴォルデモートと死喰い人たちと戦う。その過程でシリウス、フレッド、ルーピンなど大切な人たちを失うが、中でもスネイプは常にハリーに対して敵対的な態度をとっていたが、実はダンブルドアに命じられてヴォルデモートの手下となっていたことが最後に明らかになる。そこまで自己を滅して与えられた任務を果たす強さに、ハリーも読者も驚くのである。

また、hogwartsでは介入してくる魔法省に抵抗し、ヴォルデモートと死喰い人たちから自衛するために、ハーマイオニーが仲間を集めて、ハリーから「闇の魔術に対する防衛術」を学び練習する「DA (ダンブルドア軍団)」を組織する。ハリーたちが不在の間も、ネビルを中心とした一部の生徒たちが地下にもぐり、ハリー

が戻ってきたら一緒に戦うための準備をして待っていた。そして最終決戦でもそれぞれが得意な戦い方で役割を果たす。

そして何よりも、ハリー、ロン、ハーマイオニーの3人組がこの物語の中心の一つのチームとして存在している。それぞれ長所と短所がある中で、何度か仲違いも経験しながら、ダンブルドアから託された分霊箱探しの旅をして、一つ一つ課題を解決していく。

これらのチームの構成員は、時には仲間のために自分が犠牲になることを厭わない。チェスが得意なロンは、等身大のチェスの課題に挑んだ時、「これがチェスなんだ！犠牲を払わなくちゃ！」(1, 415)と自分を犠牲にしてハリーを先に進ませる(チェスもスポーツである)。

兄ダンブルドアを恨む弟アバフォースの「君自身のことより、より大きな善のほうに関心があったとは思わんのか？・・・君が使い捨てにされているとは思わんのか？」「自分を大事にしろ、こうすれば生き残れると、なぜ言わんのだ？」との問いに、ハリーは「なぜなら・・・ときには、自分自身の安全よりも、それ以上のことを考える必要がある！ときには、より大きな善のことを考えなければならない！これは戦いなんだ！」(7下268)と答える。ヴォルデモートという敵を倒さなければならないという大きな目的のためには自分を犠牲にすることを厭わない覚悟ができた成長の証となる台詞である。

(3) 指導者 (リーダー)

ダンブルドアはhogwartsの校長であり、ヴォルデモートに対抗する勢力の指揮者であり、ハリーの庇護者である。パブリック・スクールの校長のようにあらゆることを全て見通してお

り、威厳があり、しかし大らかでユーモアもあり、尊敬されるべき人物である。ハリーも全幅の信頼を寄せていたのだが、途中ダンブルドアが自分に秘密にしていることがあり、何の説明もしてくれないと不満を感じるようになり、その信頼が揺らぎ、度々憤りを顕わにする。しかし徐々に、それは時間をかけて自分で見つけなければいけないことを悟らせるためのダンブルドアの考えであったことを理解していく。ダンブルドアは自分に仕事を残した、それは簡単ではないが、自分にはそれを仕上げる義務があるし、自分でなければならないということを悟る。

「ここ何か月もの間自分を迷わせてきたダンブルドアに対する疑いや確信のなさを、口にしたくはなかった・・・ダンブルドアがハリーに示した曲がりくねった危険な道をたどり続けると決心し、自分の知りたかったすべてを話してもらってはいないことも受け入れ、ただひたすら信じることに決めたのだ。」(7下260)

ハリーは「憂いの籐」を使ってスネイプの記憶をたどる中で、自分の中にヴォルデモートの魂の一部が入り込んでおり、自分が生きている限りヴォルデモートは死なない、すなわちヴォルデモートを倒したければ自分がヴォルデモートに殺されなければならないことを知る。「ハリーの任務は、両手を広げて迎える『死』に向かって静かに歩いていくことだった。」(7下458) 全てはダンブルドアの「より大きな計画」(7下459)のためだった。しかもハリーが自分自身の力で、それがたとえ自分の死であっても最後までやり通すこともダンブルドアは見通していたのだ。

後にダンブルドアが釈明したことによると、

彼もハリーのことを信用していなかった。自分が過去に死を克服する方法を求めるといふ過ちを犯したように、ハリーも「死の秘宝」のことを知ってしまったら、それに取りつかれてやるべきことが果たせなくなることを危惧して、全てを教えなかったというのだ。また、ダンブルドアには自分の妹を死なせてしまったかもしれないという過去の負い目もあり、必ずしも完璧な人物ではない。しかし、ハリーを正しい方向に導き、最終的にハリーが完全に信頼するに至るといふ点は、『トム・ブラウン』と同じ結末である。

また、ハリー自身もDAでは仲間たちに防衛術を教えたり、クイディッチ・チームのキャプテンになり、リーダーとしての葛藤なども経験する。ダンブルドアの言いつけで3人が「分霊箱」を探していることは秘密にしなければならなかったのだが、他の仲間と言えないことに罪悪感を抱く。しかし最後には、捕まりに行くのではないかとネビルに聞かれて「『違うよ』ハリーはすらすらと嘘をついた。」(7下464) 大きな目的のためには、それぞれの役割を果たしてもらうためには、リーダーとして秘密や嘘も必要なことがあると知り、ハリーはダンブルドアの後継者の道を進んでいるのである。

7. おわりに：シーカーとして

死を覚悟したハリーが遺品のスニッチに「僕はまもなく死ぬ」と囁くと、割れて中から「蘇りの石」が現れ、蘇った両親たちに伴われてヴォルデモートの元へ向かう。そしてヴォルデモートの前に命を投げ出したが、ハリーは死ななかった。意識を取り戻して再び対戦し、ニワトコの杖を呼び寄せ、「的を逃さないシーカー

の技で」(7下537) 捕える。ヴォルデモートは撥ね返った自分の呪文に撃たれて死に、長かった戦いに決着がつく。

シーカーはクイディッチの試合中、他の選手たちの動きや点数を把握しながら、一人でスニッチを探し、試合を終わらせる役目を負っている。ハリーの担っていた運命はまさにシーカーとしての働きだったのである。クイディッチというスポーツを知り、それを通して様々な経験をして心身共に鍛えられたことが、一見何の関係もないヴォルデモートとの戦いに活かされていたのだ。それはパブリック・スクールのゲームで学んだ少年たちが社会に出て活躍するのと同じである。だからこそハリーはシーカーとしてこの物語を終わらせることができたのである。

引用文献

- 1) Fraser, Lindsey, *An Interview with J.K. Rowling*, (London: Mammoth, 2000), 20.
- 2) Fraser, 20.
- 3) 池田, 『自由と規律—イギリスの学校生活—』(岩波書店, 1949, 1963改版), 158.
- 4) 鈴木秀人, 『変貌する英国パブリック・スクール—スポーツ教育から見た現在—』(世界思想社, 2002), 17.
- 5) 池田, 144-45.
- 6) 池田, 147-48.
- 7) 鈴木, 16.
- 8) 鈴木, 50.
- 9) 池田, 108-117.
- 10) [http://www.pottermania.jp/info/interviewprogram/20011028 SydneyMorningHerald](http://www.pottermania.jp/info/interviewprogram/20011028%20SydneyMorningHerald)
- 11) <http://www.amazon.com/gp/feature.html?docId=6230>
- 12) Fraser, 53.
- 13) 池田, 168.
- 14) 池田, 168.

テキスト

(引用は巻数と頁数を表す。旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。)

1. J.K. ローリング, 『ハリー・ポッターと賢者の石』, 静山社, 2003
2. ———, 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』, 静山社, 2004
3. ———, 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』, 静山社, 2006
4. ———, 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』, 静山社, 2007
5. ———, 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』上・下, 静山社, 2008
6. ———, 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』上・下, 静山社, 2010
7. ———, 『ハリー・ポッターと死の秘宝』上・下, 静山社, 2010

Rowling, J.K., *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, London: Bloomsbury, 1997

———, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, London: Bloomsbury, 1998

———, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, London: Bloomsbury, 1999

———, *Harry Potter and the Goblet of Fire*, London: Bloomsbury, 2000

———, *Harry Potter and the Order of the Phoenix*, London: Bloomsbury, 2003

———, *Harry Potter and the Half-blood Prince*, London: Bloomsbury, 2005

———, *Harry Potter and the Deathly Hallows*, London: Bloomsbury, 2007

ケニルワージー・ウィスプ (J.K. ローリング), 『クイディッチ今昔』, 静山社, 2014

Kennilworthy Whisp (J.K. Rowling), *Quidditch Through the Ages*, London: Bloomsbury, 2001

トマス・ヒューズ, 『トム・ブラウンの学校生活』上下, 岩波書店, 1952, 1996

An Old Boy (Thomas Hughes), *Tom Brown's School Days*, London: Macmillan & Co., 1868

参考文献

新井潤美, 『不機嫌なメアリー・ポピンズ』平凡社, 2009

池田潔, 『自由と規律—イギリスの学校生活—』, 岩波書店, 1949, 1963改版

小林矩子, 『ハリー・ポッターとその時代』, 武蔵野大学出版会, 2008

鈴木秀人, 『変貌する英国パブリック・スクール—

- ポーツ教育から見た現在』, 世界思想社, 2002
- 鈴木秀人, 谷藤千香, 小松恵理子, 菊幸一, 山本巧, 『スポーツの国イギリス』, 創文企画, 2002
- 菱田信彦, 「ハリー・ポッターとイギリス階級社会」, 『Tinker Bell』, 第51号, 日本イギリス児童文学会, 2006, 32-46
- , 「『ハリー・ポッター』シリーズと『学校物語』」, 『川村英文学』 第19号, 川村英文学会, 2014, 1-19
- J. ハーグリーヴズ, 佐伯聰夫・阿部生雄訳, 『スポーツ・権力・文化—英国民衆スポーツの歴史社会学—』, 不昧堂出版, 1993
- ピーター・ミルワード, 『童話の国イギリス』, 中央公論社, 2001
- J.K. ローリング, L. フレーザー, 『ハリー・ポッター裏話』, 静山社, 2009
- Adney, Karley and Hassel, Holly, *Critical Companion to J.K. Rowling*, New York: Facts On File, 2010
- Blake, Andrew, *The Irresistible Rise of Harry Potter*, London: Verso, 2002
- Fraser, Lindsey, *An Interview with J.K. Rowling*, London: Mammoth, 2000
- , *J.K. Rowling: the Mystery of Fiction*, Scotland: Argyll Publishing, 2011
- Musgrave, P.W., *From Burton to Bunter*, London: Routledge & Kegan Paul, 2016
- Pazdziora, John Patrick and Snell, Micah, ed., *Ravenclaw Reader*, Unlocking Press, 2015
- Starrs, D. Bruno, “Quidditch: J.K. Rowling’s Leveler” in Mead, David and Frelik, Pawel ed., *Playing the Universe*, Lublin: Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Sklodowskiej, 2007
- Whited, Lana A. ed., *The Ivory Tower and Harry Potter*, Columbia and London: University of Missouri Press, 2002